

# 混成語のアクセントに関する話者間変異<sup>1</sup>

## Cross-speaker variation in the accentuation of blends

山部順治

Junji YAMABE

キーワード：混成語、アクセント、音節構造、話者間変異、アンケート調査、言語学教育、  
ポケモンと言語学

Keywords: blend, accent, syllable structure, variation among speakers, questionnaire survey,  
teaching linguistics, Pokémon and linguistics

**要旨** 本稿は、日本語の即席の混成語においてアクセントがどの位置に来るかを記録し、それを決定する規則性を明らかにする。資料収集のため、混成語の例をウェブサイト「ポケモンフュージョン」日本語版 (<https://pokemon.alexonsager.net/ja>) で生成されるキャラクター名を取り上げ、言語学の入門的授業において履修学生を対象にアンケートを行なった。Bat-El & Cohen 2013 (英語)、姜 2014 (韓国語釜山方言) では、既製の混成語のアクセント規則が明らかにされている。本稿でこの知見を、話者間の変異の実態を捉えるために援用した。本稿の資料の分析から、語頭アクセントが関係する規則性が2点明らかになった。

### 1 背景と目標

本稿は、日本語の即席の混成語においてアクセントがどの位置に来るかを記録し、それを決定する規則性を明らかにする。資料収集のため、混成語の例をウェブサイト「ポケモンフュージョン」日本語版 (<https://pokemon.alexonsager.net/ja>) で生成されるキャラクター名を取り上げ、言語学の入門的授業において履修学生を対象にアンケートを行なった。

第1節では、先行研究を参照してその知見をまとめ、本稿の論点を輪郭づける。

本稿で言う混成語とは、(1)の(a)のようなものであって、(b)の複合語の短縮から区別する。両者の共通点は、いずれも2語の語基からできた語であって、前に来る語基（以下、記号「W1」で言及する）の一部分と、後ろに来る語基（以下、「W2」）の一部分からなる。

---

<sup>1</sup> 本稿の概略的内容は、前勤務校、現勤務校、およびデリー大学で発表した。みなさんからのフィードバックに感謝する。もともなった研究のために資料を提供してくれた前勤務校の授業履修者の学生のみなさんには特別に感謝を申し上げます。この研究は、日本学術振興会 科学研究費学術研究助成基金 17K0270300, 21K0054000 (研究代表者：山部順治) の助成を受けている。

相違点は、(a) 混成語では W1 の前半 (A) と W2 の後半 (D) が発音され、(b) 複合の短縮では W1, W2 とともに前半 (A と C) が発音される。発音される部分を**太字**で示す。

- (1) a. 混成語 blend、**AB** + **CD** → **AD**  
ゴリラ + クジラ → **ゴジラ**  
タケトンボ + ヘリコプター → **タケコプター**
- b. 複合語の短縮 clipped compound、**AB** + **CD** → **AC**  
ポケット + モンスター → **ポケモン**  
キムラ + タクヤ → **キムタク**

ウェブサイト「ポケモンフュージョン」は、2種の既存ポケモンキャラクター（本稿では「親ポケモン」と呼ぶことにする）を掛け合わせて新しいキャラクター（同、「子ポケモン」）を、名前（カナ文字）と容姿（画像）ともに生成する。<sup>2</sup> 子ポケモンの名前は混成語である。(2)に事例を2つ示す。

- (2) **AB** + **CD** → **AD**  
ピカチュウ + ニドリーナ → **ピカリーナ**  
ニドリーナ + ピカチュウ → **ニドチュウ**

混成語の形式についての研究は、音節構造の側面とアクセントの側面とに大別すると、多くは前者に関心を置く (Bal-El 1996, 2006, Gries 2004, Kubozono 1990, 1999:37, Piñeros 2004, Tomaszewicz 2013, Trommer & Zimmermann. 2013)。これらの研究では、2個の語基はどちらが先に来るか (W1, W2)、また、どこからどこまでの分節音が混成語に残って現れるか、((1a)の A, B, C, D) を決定する要因が明らかにされている。これら研究のあるものは、音節構造を主に扱いながら、それに関する韻律的規則の守備範囲の一部としてアクセントを扱う (Cannon 1986, Arndt-Lappe & Plag 2013)。他方、アクセントの側面を詳細に論じた研究には、英語 (Bat-El & Cohen 2013, Renner & Lalić-Krstin 2011)、韓国語釜山方言 (姜 2014) における研究があり、本稿に関連する知見を次ページ以下で紹介する。

ポケモンフュージョンでは、音節構造に関する側面に関しては、語基は組み合わせる相

---

<sup>2</sup> 組み合わせに伴う多様な変容を名前と画像とにおいて同期させるプログラミング上の仕掛けについては、同サイトのコンテンツ制作者 Alex Onsager 氏による解説

(<https://www.alexonsager.com/2013/06/04/behind-the-scenes-pokemon-fusion.html>) を参照されたい。

ポケモンフュージョンにおいては、前後位置という形式的特徴には、意味がある。例えば、(2)の上下段の例のように、両親が同じであっても言われる順番が異なるなら、子ポケモンは姿 (画像) が異なり種類の異なって感じられる。

手の語基がなんであれ、同じ形式のままである。<sup>3</sup> 個々の親ポケモンについて、Aの形、Dの形が特定されており、それらは掛け合わせ相手の親ポケモンが何であっても不変である。例えば、「ピカチュウ」については、Aの形は「ピカ」、Dの形は「チュウ」である。

(Alex Onsager氏は、A, Dの形それぞれを prefix、suffix と称する。) これに対し、実際の混成語形成においては、どの部分が残るかには、2語基の相互関係によって左右されることが(上段落であげた研究によって)知られている。実際に働いているそのような仕組みを本稿で捨象することになるので、ポケモンフュージョンで生成される子ポケモンの名前は、形式的に最良の最良の混成語でない事例もありうることに留意すべきである。本稿の調査で選定して使用した語形に関して述べれば、原理的には上述の理由で、全てが最良の候補形だとは断言できない。しかし、実際を見る限りは幸なことに、全て十分に自然な候補形の1つだと思える。

本稿で扱う混成語は、その場で作成されその場で忘れ去られるという意味で、“即席”の混成語である。これに対し、混成語の先行研究は、ある程度慣習的に定着しているという意味で、“慣習的”な混成語を扱っている。アクセントの側面を扱った研究もそうである。これらの研究では、複数の話者の間でアクセント位置が一致した混成語の事例を資料としている。つまり、それらの混成語それぞれには安定的なアクセント位置が認められる。

英語 (Bat-El & Cohen 2013)、韓国語釜山方言 (姜 2014) においては、混成語のアクセント位置は、(2)の3原則(ア)~(ウ)によって決定される。本稿では両論文の知見を枠組みとして採用する。例は、英語のそれを Bal-El から引用してある。(ア) W2のアクセント型が継承される事例ではアクセントの位置に **マーカ** を付け、(イ) W1のアクセント型が継承される事例ではアクセントの位置を **囲む**。(ウ)では混成語のアクセント位置に 下線 を引く。

(3) I. 語基のアクセント型が継承される。どちらであるかは、原則(ア)、(イ)によって決まる。

(ア) 位置

W2のアクセント型が継承される。

**fér**ti.liz.er + irri**gá**tion → fertigation

---

<sup>3</sup> ポケモンフュージョンにおいて2語基の相互関係が関係する点が1つある。すなわち、プログラムには重音脱落に相当する操作が仕込まれている。Aの末尾のカナ文字とCの初頭のカナ文字が同一でありそのままでは同一のカナ文字が2個連続することになる場合、2個は1個になる。例、「**ピカ**チュウ+ヒト**カゲ** → **ピカカゲ** → **ピカゲ**」。

(イ) 長さ

混成語の長さが (W2 と異なり) W1 と同じである場合、W1 のアクセント型が継承される。

**bal**l[óon] + párachute → **bal**lúte

II. 混成語がそれでない形態構造の語のようにアクセントを付与される。

(ウ) **simultaneous** + **broadcast** → **símulcast**

原則(ア),(イ)によって継承されるのはアクセント型 (ないしアクセント位置) であって、アクセントのある音節でない、ということに留意されたい。アクセントのある音節が削除される場合にあっても、上記の原則(ア)または(イ)が適用されるさいには、後ろから (あるいはまれに、前から) 数えて何番目の拍・音節にアクセントがある、という特徴が語基の一方から混成語へ継承される (上掲論文、および Arndt-Lappe & Plag (2013))。例えば、(3)(イ)掲載の例では、W1 の音節 lóon にあるアクセントは、音節 loon じたいは削除されるにもかかわらず、混成語で生き残って現れる。これと鏡像をなす例を(4)にあげる。ここでは、原則(ア)によって W2 の音節 dó にあるアクセントは、音節 do じたいが削除されるにもかかわらず、複合語で生き延びる (Arndt-Lappe & Plag 2013)。

(4) **prestígius** + **dóminant** → **préstitinant** (Arndt-Lappe & Plag 2013:558)

原則(ウ)は、混成語が語基からアクセントを受け継がずに、いわば一から出直して、混成語でない形態構造の語のアクセント付与規則によってアクセントを獲得する方策である。例えば、(3)(ウ)掲載の英語の例では、Bat-El & Cohen (p.208) によれば、後ろから 2 番目の音節の末尾子音が共鳴音(l など)または s であれば、アクセントは後ろから 3 番目の音節に付与される、という英語の単純語アクセント規則が適用されている。

(3)にあげられた原則あるいはそれに類似した原則は、先行研究では次のように主張されている。(ア)は、Quirk et al. (1985:1583), Arndt-Lappe & Plag (2013)にある。(ア)と同じでないものの、見かけ上類似する原則も指摘できる。「残って現れる部分に含まれる一番右側のアクセントが、混成語のアクセントなる」(Bat-El 1996:321)という原則が提案されており、これは W2 のアクセントが優先されることになるという点では(ア)と同じ働きをする。Renner & Lalić-Krstin (2011)は、この原則を採用するとともに、加えて原則(イ)を

提案している。<sup>4,5</sup>

Bat-El および姜（上掲論文）では、扱う資料に関しては、個々の混成語のアクセント位置は安定的に特定の一箇所定まっている。それに基づく議論に関しては、個々の混成語について3原則のうちどれが適用されるかが決定されているものとされ、その仕組みがどんなであるかが論じられている。

本稿は、(3)の3原則じたいを踏襲する一方、それらの相互の位置づけを次のように読み替える。3原則は卓立度の点で相違するもので、したがって、混成語形式の複数の選択肢は選好度が相違する、と読み替える。この措置は本稿の資料の性格に合わせたものだ。先行研究の資料は、アクセント位置が慣習的に安定的して一とおりである混成語からなるのに対し、本稿の資料は、話者間で変異が見られる。とくに、(イ)の適用条件が満たされる事例では、(ア)と(イ)の間で話者どうしで意見が異なる。資料のこのような性格的な相違は、先行研究が慣習的な表現、本稿が即席の表現についてであることと関連している。

本稿は、3原則を読み替えた理解のもとに、独自の調査結果とその考察を提示していく。第2節では、調査の手順を示す。第3節では、3原則を調査結果で例証する。第4節では、語頭アクセントに関する観察を示す。第4節では、2個の混成語どうしで、文字上は同一だがアクセント位置の相違のみで区別される事例を示す。各事例は3つの原則に言及して説明できる。第6節でまとめる。

---

<sup>4</sup> (3)の3原則はいずれも、形式的な条件に言及するものだが、他に、意味的な条件に言及する原則も提案されている。「混成語の主要部である語基に含まれるの（分節音や【アクセントを含む】韻律の）要素が、そうでない要素よりも、受け継がれやすい」（Moreton et al.: 2017:352-354）。ここで言う、混成語の主要部とは、混成語の指示物は主要部の指示物の一種である、という意味的關係によって定義される。例えば、flounder（ヒラメと）sardine（イワシ）からこの語順で構成される複合語については、ヒラメによって食われるイワシを表わす場合には sardine が主要部であり、ヒラメとイワシを掛け合わせたものを表わす場合には両方が主要部である（p.359）。

本論文で取り扱う混成語（子ポケモンの名前）は、全て、語基の指示物を掛け合わせたものだと特徴づけられるので、Moreton らの判定基準では両方が主要部である場合である。Moreton の原則から原則(イ)の効果が導き出せる。語基と派生語の間で長さやアクセント位置が揃って同じであるのは、一方だけが同じであるよりも多くの情報を受け継ぐことである。これは機能的に語基が復元しやすさをもたらす。W1 がアクセントを残すのは、長さやアクセントが揃うことになる場合だということになり、それは原則(イ)と同じことである。なお、W2 はどのみち別の原則(ア)のおかげでアクセント位置を残せるのでこの働きが見取れない。

<sup>5</sup> (3)の3原則の他に、語基 W1, W2 のうち長いほうのアクセントが継承されるという原則が主張された（Gannon 1986:746）が、これは本稿の資料では裏付けられない。

## 2 調査の手順

本稿の調査は、私が担当した言語学の入門科目（英語学概論 I、英語学概論 II）の授業時間内に教室で実施したアンケート調査である。2013 年度第 2 期～2019 年度第 2 期まで継続し、各学期においては 10 分程度のセッションを 4～5 回繰り返した。セッションごとの回答者数は、その学期の科目履修者数から数人分減じたものであり、学期によってまた授業回によって 20～50 の間で変動した。回答者の出身地はおよそ 8～9 割が岡山県だった。

各学期の 1 回目のセッションでは、既存のポケモンの単体のアクセント位置について調査した。回答者にアクセントの聴き取りの作業に慣れてもらうこともこの回の意図に含まれていた。回答用紙 1 枚を使用し、そこには次のような指示文を印刷してあった。質問は 25 匹のポケモンについてであり、あるセッションの初めの 5 匹について示すと次のようである。E で「リ」と「ー」が別々の選択肢であるように、選択肢は音節単位ではなく拍単位で与えられている。ただし「ッ」の選択肢はない。（実際の用紙では下側の四角内にポケモンの画像が入っていたが、本稿では全て割愛する。）

### 質問票

- ポケモン・キャラクターの名前の発音について、あなた自身が一番言う発音を教えてください。

アクセントがある音節の番号を○で囲ってください。例、1 2 **3** 4

- の記号を記入した上で、コメントがあれば自由に余白に書いてください。

A	B	C	D	E
1 2 3 4 ピカチュウ	1 2 3 4 ウツドン	1 2 3 4 5 ニドクイン	1 2 3 4 ライチュウ	1 2 3 4 5 ニドリーナ

回答方法は学期をとおして上記と同じだった。そのため、第 2 回以降セッションの回答用紙には指示を印刷しなかった。また、質問中の番号に関して、1 2 3... は語頭から順に振ってあること、また最後の番号は無核の発音を示すことに留意されたい。

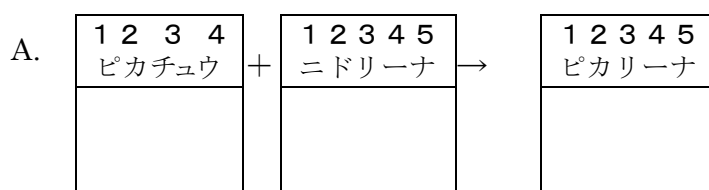
回答は次のように進行した。各ポケモンの各選択肢のアクセントを、質問中の番号順（1 2 3...）に私が発音してみせた。そのさい、教室の黒板に次のように記入しておき、番号を指し示しながら対応するアクセントで発音した。例えば、「僕、ピカ]カチュウ。僕、ピカ]

チュウ。..」、「あたし、ニ]ドリーナ。あたし、ニド]リーナ。..」のようである。（ ] はアクセント位置を示す。）

あっ、 1、2、3、4、5 だ。

回答者には、それを聴きながら自分が言うものを選択し、該当する番号を○で囲ってもらった。

2回目以降のセッションにおいては、ポケモンフュージョンを素材にして混成語のアクセント位置について調査した。次のように進行した。毎セッションでは、次のような質問8~10個が印刷してある質問紙を使用した。



第1回セッションと同様のしかたで私が発音してみせた。親ポケモンについては、第1回と同じように「僕、ピ]カチュウ。僕、ピカ]チュウ。..」のように一人称主語の文中に置いて提示する一方、子ポケモンについては、性別や年齢が不詳なので、「あれはピ]カリーナだ。あれはピカ]リーナだ。..」のように、三人称主語の文で提示した。

ポケモンフュージョンの使用は、回答者にとって自然に思える混成語の例を提示するのに有効であったと思われる。指示対象物が子ポケモンの画像として視覚的に提示されており実在感を帯びていることが長所である。

### 3 3原則を調査結果で例証する

第3節では、(3)の3つの原則をこの順に例証していく。

**3.1 原則(ア)** 原則(ア)は、ポケモンフュージョン界では最も優勢である。多くの事例で適用される。しかもそのうちのある事例では、人数的に圧倒的多数の話者がこれを適用させる。(5)に4点の例A~Dをあげる。うちB~Dは、W2のアクセントのある音節が削除され、アクセント位置だけが継承されている。ポケモンフュージョン界ではこのような場合は珍しくなく、英語では(3)(イ)や(4)にあげたような例が(長く研究者の目をすり抜けてきたほどに)まれであるのと、対照をなす。Cのように親ポケモンW2のアクセント位置が話者によって相違する場合は、その異なりに対応した形で子ポケモンのアクセント位置は話者によって相違する。記号：=無アクセント（回答用紙では4など、最後の番号が振ら

れる)。

- (5) A. ピカ]チュウ + ニド]リ]ーナ → ピカ]リ]ーナ  
 C. ゼニガメ= + フア]イヤー → ゼ]ニヤー  
 D. エ]レブー + ヒト]カゲ → エ]レ]カゲ  
 エ]レブー + ヒト]カゲ= → エ]レ]カゲ=

(5)のついてある話者判断の分布は、(6)のようである。数字については、44, 1などは人数を示す。17-Iなどは実施学期(2017年度第I学期)を示す。

(6) A..	W1	W2	子	C..	W1	W2	子	D..	W1	W2	子
1	1	1	1	1	8	48	44	1	40	1	6
2	44	1		2	11	2	3	2	1	18	17
3		43	42	3			1	3			
4			1	4	31		2	4	1	23	19
5											
			17-I				17-I				17-II

3.2 原則(イ) 原則(ア)とは対照的に、原則(イ)については、話者間で一致して適用される事例はなかなか見つからない。(7)=(8)のEとFがその例である。

- (7) E. ヒト]デ]マン + カモネギ= → ヒト]デ]ネギ  
 F. スタ]ーミー + カモネギ → スタ]ー]ネギ

(8) E.	W1	W2	子	F.	W1	W2	子
1	5	4	3	1		4	
2	1	9	1	2	37	8	33
3	28	2	27	3		2	
4		23	1	4		24	
5				5	1		5
			15-II				15-II

EとFは、原則(イ)の規則性に当てはまるものの、(次ページ以下で説明する)原則(ウ)の変種によって説明させる余地もある。すなわち、混成語「ヒト]デ]ネギ」「スタ]ー]ネギ」は複合語アクセント付与規則によって、後部要素 W2 の直前音節にアクセントを得たもの、と考えることもできる。

原則(イ)の働きが観察される事例では、必ずと言ってよいほど、同時に原則(ア)も観察される。話者間変異が観察される。例を(9)=(10)のGとHにあげる。



- (9) G. ニ]ドラ<sup>ン</sup> + ナゾノ]クサ → ニド]クサ (ア)  
 [ニ]ドラ<sup>ン</sup> + ナゾノ]クサ → [ニ]ドクサ (イ)  
 H. フシギソウ= + ニ]ドラ<sup>ン</sup> → フ]シギラン (ア)  
 フシギソ[ウ=] + ニ]ドラ<sup>ン</sup> → フシギラ[ン=] (イ)

(10) G.	W1	W2	子		H.	W1	W2	子	
1	[49]	5	[23]		1		[31]	[8]	
2			[19]		2	1	1	3	
3		[31]			3	4		9	
4	1	1	8		4		2		
5		13		17-I	5	[29]		[14]	19-I

原則(イ)は、語末母音の長短の違いは気にしないとすれば、(11)=(12)の I もこの適用例と見なせる。I の混成語「フシギブ=」が W1「フシギソウ=」の無核を継承していると考えられる根拠は、J のように W1 が有核優勢な「ビリリ]ダマ」であれば混成語は無核「ビリリブ=」になりにくいからだ。

- (11) I. フシギソウ= + ク]ラブ → フ]シギブ (ア)  
 フシギソ[ウ=] + ク]ラブ → フシギ[ブ=] (イ)  
 J. ビリリ]ダマ + ク]ラブ → ビ]リリブ (ア)

(12) I.	W1	W2	子		J.	W1	W2	子	
1	1	[49]	[33]		1	1	[49]	[34]	
2	2		1		2	8		8	
3	5		1		3	27		2	
4			[14]		4			5	
5	[41]			14-II	5	13			14-II

原則(イ)は長さが同じであれば好んで適用されるわけではない。例えば、(35)AE の混成語「フシギブー」では(イ)を適用してもよい(はずだ)が実際に適用させる話者は少数である。

**3.3 原則(ウ)** 混成語が、語基のアクセント位置を忘れて、無標なアクセントになる場合がある。実際に見られるアクセント型は無核である。(13)=(14)の K のように、どちらの語基のアクセント位置も直接的には反映しにくい場合にしばしば観察される。例えば、混成語がどちらの語基と長さが異なる場合である。<sup>6</sup> また、I のように、その他の場合でも、

<sup>6</sup> 無標なアクセントと無核とは異なる概念であり、実際に異なる範囲の事象を指す。Kubozono (2006:1159) によれば、無核を無標とする 4 拍語は、語末が軽音節の連続 (..LL) からなるものだ。この一般化には、

原則(ウ)の適用が散発的に観察される。

- (13) K. **パラセ]**クト + **ニョ]**ロモ → **パ]**ラロモ (ア)  
 パラセ]クト + ニョ]ロモ → **パラ**ロモ<sub>≡</sub> (ウ)  
 L. **ゼニガメ=** + **コ]**ンパン → **ゼ]**ニパン (ア)  
**ゼニガメ=** + **コ]**ンパン → **ゼニ**パン<sub>≡</sub> (ウ)

(14) K.		W1	W2	子		L.	W1	W2	子	
	1	22	<b>56</b>	<b>35</b>			1	1	<b>52</b>	<b>36</b>
	2	4	1	5			2	7	1	1
	3	31					3	1	1	
	4			<u>17</u>	15-I		4	48	3	<u>20</u>
										15-I

混成語が無核になる傾向、つまり原則(ウ)を使おうとする選好は、LのようにW1が無核であるときに強められる。(Lについて同様の調査結果は複数学期で繰り返し観察された。) Lに対し、(15)=(16)のMのようにW1が有核であれば、W1が有核ならその傾向は無くなる。(手持ちの資料では、L,M,Nは回答者集団が3者とも相違するものしかない。)

- (15) M. **ピカ]**チュウ= + **コ]**ンパン → **ピ]**カパン (ア)

(16) M.		W1	W2	子	
	1	1	<b>43</b>	<b>32</b>	
	2	45	1	9	
	3			1	16-I
	4		2	3	

ただし、Lで代表される傾向がどの程度一般的な現象であるかは明らかでない。これと(17)=(18)のNを比べると、とW2「コ]ンパン」(HH)とW2「モ]ルフォン」(LLH)の音節構造が違うほかは、LとNは音節構造とアクセント位置が同じだが、後者Nは無核にはならず、圧倒的に原則(ア)が使われる。

- (17) N. **カモネギ=** + **モ]**ルフォン → **カ]**モフォン (ア)

(18) N.		W1	W2	子	
	1	7	<b>47</b>	<b>41</b>	
	2	5	1	3	
	3		1	1	17-I
	4	38	1	5	

---

(13)=(14)のJは該当する(LLLL)がKは該当しない(LLH)。本稿は、LLHの語も無核であるのがある程度に自然である(さほど有標ではない)というナイーブな直観に依存している。

混成語が複合語の資格で無標のアクセントを付与される場合もある。(19)=(20)のOには2とおりのアクセント位置が観察されるが、下段のそれは複合語アクセント付与規則によって後部要素 W2「ネギ」の直前音節に置かれたものである。

- (19) O. フシギソウ<sup>ウ</sup> + カモネギ<sup>ネ</sup> → フシギネ<sup>ネ</sup> (ア) / (イ)  
 フシギソウ<sup>ウ</sup> + カモネギ<sup>ネ</sup> → フシギ<sup>ウ</sup>ネギ (ウ)複合語アクセント

(20) O.

	W1	W2	子	
1	2	9	3	
2	2	4	5	
3	5		13	
4	2	30	3	17-I
5	32		19	

#### 4 アクセントだけで区別される子ポケモンペア

ここまで述べた規則性の帰結として、2つの同綴の子ポケモンがアクセントだけで区別される、という事例がある。話者によって意見の相違があるが、この節では議論を単純にするため最も優勢な意見に注目する。(各ペアについて示した判断は同一セッションにおけるものである。また各ペアの2問はは他の数問を挟んで配置した。)

(21)=(22)のPとQは、一方の親が異なるので異なる子ポケモンである。Pでは、原則(ア)によって W2「ピカ]チュウ」のアクセントが混成語に反映し、Qでは同じく原則(ア)によって W2「ラ]イチュウ」のアクセントが混成語に反映している。ここでも、原則(ア)の場合の多くと同様に、W2でアクセントがあった音節は混成語には生き残らない。

- (21) P. カモネギ<sup>ネ</sup> + ピカ<sup>カ</sup>チュウ → カモ<sup>カ</sup>チュウ (ア)  
 Q. カモネギ<sup>ネ</sup> + ラ<sup>ラ</sup>イチュウ → カ<sup>カ</sup>モチュウ (ア)

(22) P.

	W1	W2	子	
1	3		9	
2	9	46	31	
3				
4	34		6	16-I

Q.

	W1	W2	子	
1	4	44	29	
2	8		11	
3				
4	34	2	6	16-I

(23)=(24)のRとSでは、ともに原則(イ)により、W1のアクセントが継承されている。

- (23) R. フシギソウ<sup>ウ</sup>= + タ]マタマ → フシギタ<sup>マ</sup>= (イ)  
 S. フシギ]バナ + タ]マタマ → フシギ]タマ (イ)

(24) R.		W1	W2	子		S.		W1	W2	子	
	1	4	42	11			1	2	43	9	
	2		1	3			2	3	1	3	
	3	6		13	14-II		3	42		30	
	4		6				4		5		
	5	39		22				2		7	

(25)=(26)の T と U においては、両者間で適用される原則が相違する。T では、最も多くの話者が原則(イ)を適用し「ニ]ドラン」のアクセントを引き継がせる。U では、最も多くの話者が原則(ア)を適用し「フシギソウ=」の無核を引き継がせる。

- (25) T. ニ]ドラン + フシギソウ= → ニ]ドソウ  
 U. ニドリ]ーナ + フシギソウ= → ニドソウ=

(26) T.		W1	W2	子		U.		W1	W2	子	
	1	39		23			1	2		13	
	2	3	3	7			2	1	2	6	
	3	1	7	1	16-I		3	38	8	3	
	4	3		15			4		1	24	
	5		36				5	5	35		

(27)=(28)の V では、W1 と混成語が同綴である（正確には「ウ」と「ー」とで相違する）。W1 は最も普通には「ミュウツ]ウ」である。派生語は、「タ]ツター」のアクセントを反映させ「ミュ]ウツー」という人が最も多い。

- (27) V. ミュウツ]ウ + タ]ツター → ミュ]ウツー

(28) V.		W1	W2	子	
	1	15	52	30	
	2	6	2	5	
	3	30		14	16-I
	4	3		5	

以上では、多くの話者にとって同綴のポケモンがアクセントで区別されうることを示したのだが、これと同時に、他の多くの話者にとっては区別されないことにも留意すべきである。後者の話者にとっては、同綴のポケモンは同じアクセントになるというという（弱い）原則があると考えてよさそうである。あるいは、単に質問がややこしく両者を混同さ

せた結果なのかもしれない。特に、先の問題の回答の記憶が数問後の問題まで残ってそれにつられた話者もいるようだ。

## 5 語基の語頭アクセントは混成語でどう実現するか

語基 W1, W2 が語頭アクセントを持っている場合、それはどのように実現するか、に関して観察を2点指摘する。1点はW1に関する。もう1点はW2に関する。

**5.1 W1 語頭アクセントの保存の原則** W1 のアクセントを派生語へ継承させる原則として、原則(イ)とは別の(エ)に次を指摘できる。

(エ) W1 の語頭アクセントが派生語へ受け継がれる。

この原則の働きのせいで、W1 が派生語と同じ長さでなく原則(イ)が働かない(はずの)事例においても、W1 が語頭アクセントを持つものならそのアクセントは派生語に残りやすい。

原則(エ)は話者が一致してこれを使う事例は見つけにくく、たいていの事例では他の原則とで意見が分かれる。(この点では、原則(イ)が関わる様子と似ている。)(29)=(30)のWでは大多数の話者が原則(エ)を使う。一方、XやYのように、W2を違う語に取り替えると、同じ話者たちは原則(エ)と原則(ア)の支持に二分する。(W,Xの回答は同一セッション、一方、Yの回答は別の話者集団のもの。)WでLJLHの選択肢が強く好まれるのは、この韻律が音節構造LLHの無標なアクセントである(Kubozono 2006:1154)ことに支援されていると考えられる。(L=軽音節、H=重音節)

(29) W. バ]タフリー + フシギソウ → バ]タソウ (エ)

X. バ]タフリー + リザード → バタザード (ア)

バ]タフリー + リザード → バ]タザード (エ) / (イ)

Y. バ]タフリー + ゼニガメ = → バタガメ = (ア)

バ]タフリー + ゼニガメ → バ]タガメ (エ)

(30) W.	W1	W2	子	X.	W1	W2	子	Y.	W1	W2	子
1	49	4	38	1	49	6	25	1	37	1	14
2		1		2		43		2	1	6	5
3		7		3			24	3			
4			11	4				4		32	20
5		37		5				5	1		
			14-II				14-II				18-I

(31)=(32)の Z と AA も、X や Y と同様に、(エ)を使うか(ア)を使うかで話者間で意見が分かれる例である。

- (31) Z. キ]ングラー + マルマ]イン → キングマ]イン (ア)  
 キ]ングラー + マルマ]イン → キ]ングマイン (エ)  
 AA. シャ]ワーズ + リザ]ード → シャザ]ード (ア)  
 シャ]ワーズ + リザ]ード → シャ]ザード (エ)

- |         |   |    |    |    |      |     |   |    |    |    |      |
|---------|---|----|----|----|------|-----|---|----|----|----|------|
| (32) Z. |   | W1 | W2 | 子  |      | AA. |   | W1 | W2 | 子  |      |
|         | 1 | 34 | 5  | 18 |      |     | 1 | 39 | 7  | 19 |      |
|         | 2 |    | 1  | 2  |      |     | 2 | 1  | 33 | 21 |      |
|         | 3 |    | 22 | 1  | 18-I |     | 3 |    |    |    | 18-I |
|         | 4 |    |    | 10 |      |     | 4 |    |    |    |      |
|         | 5 |    | 6  |    |      |     |   |    |    |    |      |

原則(エ)の働きは、W1,W2 とで語順を入れ替えることでも見て取れる。(33)=(34)の AB と AC が対比を示す。AB では、話者間でほぼ一致が見られ、原則(ア)によって W2 のアクセントが継承される。これに対し、AC では、原則(エ)の適用条件に当てはまり、原則(ア)による話者と原則(エ)による話者に分かれる。並行的な対比が、AD と AE の間で観察される。

- (33) AB. ピカ]チュウ + エ]レブー → ピ]カブー (ア)  
 AC. エ]レブー + ピカ]チュウ → エレ]チュウ (ア)  
 エ]レブー + ピカ]チュウ → エ]レチュウ (エ)  
 AD. コイキ]ング + ゴ]ルバット → コ]イバット (ア)  
 AE. ゴ]ルバット + コイキ]ング → ゴルキ]ング (ア)  
 ゴ]ルバット + コイキ]ング → ゴ]ルキング (エ)

- |          |   |    |    |    |      |     |   |    |    |    |      |
|----------|---|----|----|----|------|-----|---|----|----|----|------|
| (34) AB. |   | W1 | W2 | 子  |      | AC. |   | W1 | W2 | 子  |      |
|          | 1 | 1  | 40 | 35 |      |     | 1 | 41 |    | 24 |      |
|          | 2 | 42 | 1  | 7  |      |     | 2 | 1  | 43 | 18 |      |
|          | 3 |    | 2  |    | 16-I |     | 3 | 1  |    |    | 16-I |
|          | 4 |    |    |    |      |     | 4 |    |    | 1  |      |

AD.	W1	W2	子		AE.	W1	W2	子	
1	10	47	44		1	46	8	25	
2	1				2		3	1	
3	37	3	5	17-I	3	3	36	24	17-I
4			1		4	1			
5	2				5		3		

なお、W2 の語頭アクセントについてはその継承を特段に優遇する要因は無いようだ。(言い換えると、原則(エ)の適用範囲は、W1 だけに限定されており、両方の語基へは一般化されないようだ。) W2 のアクセントは、そもそも原則(ア)のおかげで、語頭にあってその他の位置にあっても継承されやすい(例、(5)=(6))。また、資料を点検した限りでは、W2 の語頭アクセントが他の位置のアクセントよりも特段に継承されやすいという様子は見られない。

W1 にとって語頭アクセントが特別であることの動機付けは、語頭が W1 の生き残る部分であることに起因すると考えられる。分節音だけでなくそこにあるアクセントも揃って同じであるというのは、一方だけが同じであるよりも、多くの情報を受け継ぐことである。W1 の復元を助ける手掛かりとして役立つことであり、この原則はその機会を利用するためのだと考えられる。一方、語頭アクセントでないアクセントは、W1 でそれがある音節は、混成語には残存せず、そのためアクセントだけを残したところで W1 の復元を助ける手掛かりとしては弱く、アクセントを残す動機づけが弱い。

**5.2 語頭から数える** 語頭アクセントに関連するもう1点の観察は、W1 のそれに関するものだ。日本語の語のアクセント位置の決定においては、一般に、語末から拍数を数える。ポケモンフュージョン界でもそうである。ところが、W2 が語頭アクセントを持つモノである場合には、話者によって、語頭から数える人と、語末から数える人がいる。そのため、次例では話者によって違うアクセント位置になる。両群の話者ともに、使っている原則は原則(ア)であって、W2 のアクセントを混成語へ継承させている。そのさい、AF 上段の話者は、W2 「エ]レブー」から、語頭から数えて1番目の拍にアクセントがあるという特徴を継承させており、一方、下段の話者は、同じ表現から、語末から数えて4番目の拍にアクセントがあるという特徴を継承させている。AG では、「ギャ]ロップ」のアクセントから、語頭から数えて1番目という特徴を混成語で実現させるか、あるいは、語末から数えて3番目というという特徴を実現させるか、話者は二分する。(質問 AF と質問 AG とで語基の「フシギソウ」のアクセント分布が一致しないのは回答者集団が異なるためである。)

(35) AF. フシギソウ= + エ]レブー → フ]シギブー (ア)  
 → フシ]ギブー (ア)

AG. フシギソウ= + ギャ]ロップ → フ]シギロップ (ア)  
 → フシ]ギ]ロップ (ア)

(36)	AF.	W1	W2	子		AG.	W1	W2	子	
		1	3	54	23		1	6	50	19
		2	3		10		2	1		5
		3	7		9		3	13		22
		4			1	16-I	4			1
		5	41		11		5	30		3

語頭から数えてアクセント位置が決まる事例としては、Kawahara & Wolf 2010, Kawahara & Kao 2012 が、グループ名を表わす接尾辞「ズ」で終わる派生語について報告している。これらの研究によれば、ある一群の話者にとっては、同接尾辞で終わる派生語においては、派生語の語頭から数えることによって、1 番目の音節にアクセントが付与される。<sup>7</sup> (ギンタマ= -ズ → ギ]ンタマーズ) 本稿の事例もこれと似たところがある。ある一群の話者にとっては、「エ]レブー」「ギャ]ロップ」のような語頭アクセント語が W2 である混成語においては、混成語の語頭から数えることによって、1 番目の音節に W2 由来のアクセントが来る。ただし、この規則性の適用範囲 — 語頭アクセントの W2 を持つ混成語のうちどんな混成語で成り立つか — は現状明らかでない。

## 6 まとめ

本稿では、先行研究に見られる混成語アクセントに関する知見を、話者間の変異をとおして観察した。また、W1 の語頭アクセントを保存しようとする傾向 (原則(エ)) や、位置を語頭から数える操作を指摘した。原則(ア)、(イ)、(エ)は、いずれも語基の情報を混成語へ持ち越すもののものであり、混成語中の語基の認知を助ける働きをする。このうち、(イ)は語の長さアクセントが揃って混成語に持ち越され、(エ)はアクセントとその音節とが揃って混成語へ持ち越されることを促す。より多くの情報が混成語へ継承され、そのおかげで語基が認知しやすくなる。

<sup>7</sup> 接尾辞で終わる派生語のアクセント付与の仕組みについては、そう考えない分析 (儀利古、ほか 2011) も提案されている。



## 参考文献

- Arndt-Lappe, Sabine & Ingo Plag. 2013. The role of prosodic structure in the formation of English blends. *English Language and Linguistics* 17.3: 537-563.
- Bat-El, Outi. 1996. Selecting the best of the worst: the grammar of Hebrew blends. *Phonology* 13: 283-328.
- Bat-El, Outi. 2006. Blend. Keith Brown, ed., *Encyclopedia of Language & Linguistics*, second Edition, volume 2, 66-70. Oxford: Elsevier.
- Bat-El, Outi. 2013. Stress in English blends: a constraint-based analysis. Vincent Renner, François Maniez, & Pierre J.L. Arnaud, eds., *Cross-Disciplinary Perspectives on Lexical Blending*, 193-211. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Cannon, Garland. 1986. Blends in English word formation. *Linguistics* 24: 725-753.
- Gries, Stefan. 2004. Shouldn't it be *breakfunch?*: A quantitative analysis of bend structure in English. *Linguistics* 42: 639-667.
- Kawahara, Shigeto, & Sophia Kao. 2012. The productivity of a root-initial accenting suffix, [-zu]: Judgment studies. *Natural Language and Linguistic Theory* 30: 837-857.
- Kawahara, Shigeto, & Matthew Wolf. 2010. On the existence of root-initial-accenting suffixes: An elicitation study of Japanese [-zu]. *Linguistics* 48: 837-864.
- Kubozono, Haruo. 1990. Phonological constraints on blending in English as a case for phonology-morphology interface. *Yearbook of Morphology* 3: 1-20.
- Kubozono, Haruo. 1999. Mora and syllable. Natsuko Tsujimura, ed., *The handbook of Japanese linguistics*, 31-61. Malden, Massachusetts: Blackwell.
- Kubozono, Haruo. 2006. Where does loanword prosody come from? : A case study of Japanese loanword accent. *Lingua* 116: 1140-1170.
- Moreton, Elliott, Jennifer L. Smith, Katya Pertsova, Rachel Broad, & Brandon Prickett. 2017. Emergent positional privilege in novel English Blends. *Language* 93: 347-380.
- Piñeros, Carlos-Eduardo. 2004. The creation of portmanteaus in the extragrammatical morphology of Spanish. *Probus* 203-240.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, & Jan Svartik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. Essex: Pearson Education Limited.
- Renner, Vincent, & Gordana Lalić-Krstin. 2011. Predicting stress assignment in lexical blends: the case of English and Serbian. *ELLSIIR International Conference, 2009, Belgrade, Serbia*, volume 1, 265-273.  
<https://hal.archives-ouvertes.fr/file/index/docid/712647/filename/Renner-LalicKrstin2011.pdf>
- Tomaszewicz, Ewa. 2013. Output-to-output faithfulness in the phonological structure of English blends. Renner, François Maniez, & Pierre J.L. Arnaud, eds., *Cross-Disciplinary Perspectives*

*on Lexical Blending*, 213-232. Berlin: Mouton de Gruyter.

Trommer, Jochen, & Eva Zimmermann. 2013. Portmanteaus as generalized templates. Vincent Renner, François Maniez, & Pierre J.L. Arnaud, eds., *Cross-Disciplinary Perspectives on Lexical Blending*, 233-258. Berlin: Mouton de Gruyter.

姜 英淑 2014. 「韓国語釜山方言の混成語形成におけるアクセント」『日本言語学会第 151 回大会発表要旨』

儀利古幹雄・大下貴央・窪蘭晴夫 2011. 「語末が「ズ」であるチーム名・グループ名のアクセント分析」『国立国語研究所論集国立国語研究所論集』2:1-18.

(やまべ・じゅんじ 熊本大学)